昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十六年十二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一五三号）

慈光

近角先生記念号

目次

教行信証「信巻」講話（八）……近角常観…（1）
恩師の警策を想う……柳瀬留治…（6）
近角先生講話聞記……聴聞子…（14）
心と真実……佐藤強三郎…（18）
歎異抄の放つ光……花田正夫…（22）

第十三巻　第十二号

教行信証『信巻』講話（八）

近角常観

一　一　是心作仏　是心是仏

次には、

論の註に曰く。彼の安楽浄土に生れんと願ずる者は、要ず無上菩提心を発すとのたまえり。

今云う如く石、鉄の浅間しき私なれども、その石、鉄を飽くまで融かさな措かぬとの、大慈大悲の火のお心でお向かい下さる御親切であるために、その一念に石、鉄の私が心底まで火とされてしまう。その火となるは、火とするまで見捨てぬとの仏の大慈大悲の火のお心が、此方の心に届いて下さる為なれば、その頂いた大慈大悲が即ち無上菩提心なのである。即ち浄土の大菩提心となるのであります。

次に

又云く。是心作仏とは、云うこころは心能く作仏するなり。是心是仏とは、心の外に仏ましまさずとなり。譬えば火木従り出でて、火、木を離ることを得ざるなり。木を離れざるを以ての故に、則ち能く木を焼く。木火のために焼かれて、木即ち火となるが如しとのたまえり。

真宗に於いてもここまで言われてある。処がこゝが従来間違い易くて困る処なのであります。　先ず

「是心作仏とは、言うこころは心能く作仏するなり」

真宗では如何なる事ありても、自分の心が仏になるという法は無い。仏の方よりの願作仏心で、仏の方より飽くまで私を仏にせにやならぬとの広大の思召しが、私の心に届いて下さるため、長多き煩悩具足の身なれども、心よく作仏されるとなるのである。故に仏の方よりの遣る瀬なき願作仏心の為に、思いがけなき願作仏心を私の心に起こさせて頂くとなるのであります。

そうでなくては、元来仏が有難いなどの念の起って来べき私でない。しかるにその奴が不思議なる哉、思いがけなきお慈悲に出遇わして貰うため、「広大の思召しの有難や」と、鉄の私が忽ち火と作されてしまうのである。即ち真宗に於いては、此方の方から仏と作るのではなくて、仏の方より仏と作されるのであります。　又、

「是心是仏とは、心の外に仏ましまさずとなり」

この心が是れ仏であるなどとは、真宗にあってはどんなことがあっても言えぬ。さりながらこの仕て見ようなき心を飽くまでお見捨てなき広大の思召しが、私の心に移って下さるのであるために、此の石塊、土塊の心が、「ああよくも〳〵思召しの有難や」と、その一念に私の心中一杯に仏のお心が入り満ちて下され、満心お慈悲ならざる隅はないようにされてしまうのである。処がここの味わいが、直ぐ「自分はもう信仰を得た。悟りを開いた」と、恰も自分の心がはや仏となったかの如く誤解されやすくてならぬのである。真宗に於いては、どんな事ありても自分の心が直ぐ広大な恵みの仏であるなどとは言えぬのであります。

一　二　木即ち火と為るが如し

次に

「譬えば火木より出でて、火木を離るることを得ざるなり。木を離れざるを以ての故に則ち能く木を焼く。木火の為に焼かれて木即ち火となるが如しとのたまえり」

木は木である。私共は何処までも凡夫の木なのであります。然るに「火木より出でて」は、擦られると火が出る。けれども今私共凡夫の木を焼き尽さんとのお慈悲の火は何処から来るか。私共が木なる処より、その木であることが哀れで見て居られぬ処から現れ下されたお慈悲の火であれば、即ち私共が木である処から現れ下されしお慈悲の火であるのである。私共の木を離れて、お慈悲の火はあること無いのであります。而て斯く本来木を焼かんとのお慈悲の火であれば、一度木に火が燃えつけば、如何なることがありてももう離れぬ。即ち終に火木を焼いて木が全然火と作されてしまう。するとその火となった木を置いて外に何処に火があるのであるか。斯く飽くまで〳〵お見すて無きお慈悲の火のために、煩悩の薪がまるまる火とされてしまうが、是心作仏、是心是仏の味いであるとのお知らせであります。

そこでかく何処までも煩悩の木である処の私を、その木を飽くまで焼いてやりたいとの思召である処が実に有難いのである。蓮如上人「御一代聞書」には、

衆生をしつらいたまう。しつらうというは、衆生のこころをそのままおきて、よきこころを御くわえそうらいてよくめされなし候。衆生のこころをみなとりかえて、仏智ばかりにて、別に御したてて候ことにてはなく候。

即ちここなのであります。茲をまた聖人の「曇鸞讃」に

本願円頓一乗は、逆悪摂すと信知して、

煩悩菩提体無二とすみやかにとくさとらしむ。

私共悪い処のある者を捨てぬとのことが、逆悪摂すと信知

するとのことである。この悪い所のある者を捨てぬとの仰せである事を頂かねばならぬのであります。

それを皆さんは「悪いけれど極楽に参らせて貰える」と悪いとこをお見捨てのないお慈悲の方は抜きにして、直ぐ結果の方を先に見られるからいかぬ。

昨日も、或方に「先生お慈悲を頂いて極楽に参らせて貰います」と言われる。仏のお慈悲は何も私共が極楽に参らせて貰う事で無い。斯く私の悪しきを何処までもお見捨ての無いお慈悲のために、

わがはからいにて、地獄へもおちずして極楽にまいるべき身なるがゆえなり。……（蓮如上人御文）

地獄に行く奴を、思いがけないお慈悲の思召しで、極楽へ参らせて下さるのである。それを悪うても参らせて下さると言うてるのでは、初めからお慈悲が決まりきった事になって、何処が思いがけない思召しであるのか、サッパリ分らぬ。然うではなく、この地獄ならでは行き場の無い身を、飽くまで哀れ〳〵との思召しであることを思いがけなくも知らされるから「あゝよくも〳〵」と、その思召し一つに満腹して、安心さして貰うことが出来るのである。この遣る瀬ない思召しを頂いたのでなくして、唯「悪うてもお助け」と押えつけて居るのでは、何程有難い〳〵と言うて居ても、心の底に何処か済まぬ処が抜けぬのであります。

一三　「斯る者をお助け」とはお慈悲をすかした言葉

喩えば私共、善くない例なれども、人から金を借りたとします。するとこれを返さなならね。処がいつ幾日返済の期限が来ても返すことが出来ぬ。処が先方は頗る気の優しい人で、承知ならぬ処なれども「向うも何か事情があるのだろう」と、待って呉れたとする。

又約束の時が来た。けれども返すことが出来ぬ。今度は定めて腹立てられるだろうと思うて行くと、思いがけなく先方は「君相変らず出来ぬのだろう」と、恰も出来ぬを予期して居たという如き風である。

そのうちまた約束の時が来た。返すことは出来ぬ「如何に何でも今度こそはもう言い訳の言葉が無い。何程辛抱強き人でも、この度こそは愛相を尽かさるるだろう」と思うて行くと、意外に先方はまた「出来ぬだろうと思うて居た。君の苦しいのは能く分っているから、決して苦しいのに無理して貰おうとは思わぬ。自分の方は何時でもよいから餘り心配せぬようにやり給え」と。思いがけなくこう云われて見ると、今迄ただ済まぬ〳〵と自分の義理立てばかり言うて居て、先方のそれ程までの親切であることを無にして居たことが何とも済まなんだ。「あゝこれ程にまで不

義理、済まぬことを重ねて居るのに、それに飽くまで呆れて下さらずかほどまでに言うて下さるとは、よくも〳〵」と、終にこちらの義理立の方が敗けて、ここで始めて先方の御親切の程が頂かれるとなるのであります。

処が「イヤ返せぬのは悪いけれども、向うは善い人だから、頼みに行ったらきっと待って呉れるだろう」。「向うは辛抱強い人だから、済まぬけれども呆れはして呉れぬだろう」と、斯う言うているのでは、本当に先方の親切に頭が下ったのではない。実は頭から先方を一呑にし、馬鹿にしてしまって居るのである。

ところが御同よう、かく此方からは、飽くまで馬鹿にし、呑み込み、すかし、撥ねつけ、突き離し、色々やるのであるけれども、仏の方では、もと〳〵その性分が哀れとお起し下された本願であれば、如何なることあっても呆れ給はず、怒り給わぬ、益々その根性が哀れ〳〵との仰せである事が、何かの機会に一度分って見ると、「成る程、今迄はみな仇に受け、すかして居ったのであった。「和讃」に、

三恒河沙の諸仏の、　出世のみもとにありしとき
大菩提心おこせども　自力かなわで流転せり。

御同よう、今日まで「ああか、斯うか」と、様々に心を持扱った事は実に切り無しである。

けれども、それが皆、自分のことは自分で始末しきる根性から、総て切角の思召しを撥ね仆し、すかしておったのである。「今日までしたこと、思うたこと、一つとして仏の思召しを無にして居ぬものとてはなかった。ああ斯くまでおろそかにして居たものを、仏は私のその無にする性分が可哀相で遣る瀬なきお心を運んで下されたのであったか、有難や」と、その御真実を知らされたため、もう頭が上がらない。「ああ長い間よくもお待ち下されました」と、今までの総てをみな謝り果て、その思召し一つに腹ふくらして貰ったが「逆悪摂すと信知して」なのであります。

で、始めから「斯のような者をお助け」と言っているのでは、てんからお慈悲を甘く見、馬鹿にしてかかって居るのである。

ところがかく言うと大変むつかしい事に取られるかも知れぬも、六つかしいことではない。皆様がむつかしく取られるは、自分の方より「何かせんならぬ」と取られるからである。その「せんならぬ」ように有ったり「することいらぬ」ようにあつたりする。いつ角出来る気でそんな事思うて居る。その汝の持前の性分が哀れで、親の方は離れて去るわけにいかぬとの仰せなのである。この思召しである事を頂かして貰う一つなのであります。

一四　お慈悲との相撲に勝っている。

そこで此の間からいう例の相撲の喩である。あれを言うと、皆様が「相撲をなる程取っているな」と、取って居る方の事は考えらるるけれども、自分の方が仏を捩じ伏せ、勝っているのであることに気をつけられぬから可かぬ。

凡そ世の中に「仏など有るものでない」と思うている人「仏の存在がどうか」など思うている人。この種の人は初めからお慈悲を馬鹿にし、軽蔑し、頭から取り合わずに遁げて負かして居る人なのである。

処が仏の方よりは「汝が軽蔑していることも、疑って居ることも、ちゃんと知っている。知ったからそのさもしい性分が哀れで捨てておけぬのである」と、最後にこの思いがけない仰せであることを聞かさるるため、如何に馬鹿にして居た奴ももう頭が上らない。綺麗に投げを喰わせらるるのであります。

処が相撲にも種々の手があって、又中にはすねて相撲を取る奴も有る。「自分の様な悪い事では、とても助けて貰われぬ」、これは拗ねて負かしてやろうという、甚だ男らしからぬ相撲である。この種の人は自分でも仏と張り合って、相撲をとってるなどとは毫も思うて居ぬ。けれども何処までも人の言うことには耳を貸さぬ。しぶとい根性に至っては同じである。この根性がお慈悲の上にも。人生の上にも到る処に顕れて来て「仏は助けて下さるけれどもこんなことでは仕ようがなかろう」「こんなことでは世の中は困ったものぢや」「この様な悪いことでは人が呆れて仕舞うだろう」甚だ我身をへり下った言い分で、まことに立派なようであるが、矢張り仏の哀れみを無視し、つきやっているのである。聖覚法印が『唯信抄』の御教化には

よの人つねにいわく、仏の願を信ぜざるにはあらざれども、わが身の程をはかろうに、罪障のつもれることはおおく、善心のおこることはすくなし。こころつねに散乱して、一心をうることかたし。身とこしなえに懈怠にして精進なることなし。仏の願ふかしというとも、いかでかこの身をむかえたまわんと。……

即ち向うは親切にして下さるけれども、自分の方が悪くてしようがないと、お慈悲の深さに対して、飽くまで吾が身の悪しさを以て張合って行こうという機歎きであります

処がこちらはこれでやっているのに、仏の方からは、

……この思いまことにかしこきに似たり憍慢をおこさず高貴のこころなし。しかはあれども仏の不思議力をうたがうとがあり。仏いかばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なればすくわれがたしとおもうべき。

「一体そのように自分が悪い〳〵と歎いて居るのは、親はその汝の悪しさを知らずに言うて居ると思うのであるか、その汝の悪しさのため、歎かなならぬ処が、如何にも可哀想で、親は放って置けぬから出て来たのではないか。その親はたとへ如何程汝に罪があろうが、その罪は初めから承知の上だと言うて居るでは無いか。一体仏に何れ程の覚悟がありて、捨てぬとは言うて居るのだと思うている」と、斯く飽くまで〳〵言うて下れるために、終に如何な拗ね者も恐れ入りて「有難や〳〵」と頂かして貰われるとなるのである。

殊に最後に申したいのは、初めから仏と立ち合わずに、頭からすかしてしまう一類の人である。即ち「仏は助けてやる〳〵」と、有り切りの力を絞って向って下されてあるのに「如何にも私は悪う御座います」と初めから仏をあまして、空を打たせる奴である。他力を聞き慣れてる人の間にはこれが多くてどもならぬのであります。即ち初めから悪い者をお助け」と、初めから仏の御心配を引きはずして遁げて仕舞うもの故。切角の五劫永劫の御苦労も、仏の独り踊りになってしまうてある。而も「悪い者をお助け」と、一向我が身の悪しさに就いては平気で居るのは、極端に言うと、全く仏の本願とは離れ、却って本願を口実に、勝手に悪いことをして居るものであります。

之には御同よう、ちと驚きを立てなくてはいかぬのである。言うてる私から第一そうなのであるからである。うつかりすると、私共悪いのは「是れも御存じ、あれも御見通し」と、仏の方では、その私の悪しさを助けてやろうとお向い下れてあるのに、私の方はすかし、いなして遁げてしまうというこれになってある。

処が仏の方は、そのすかし遁げる奴故、もう相手にして下さらぬかというに、否、そのすかし、いなして何処までもまことになれない生れつきが哀れとのお慈悲でまします。もの故、遁るを追わえ、すかすをとりつき、とうど最後私を取り押えて下さる。押えられて見ると、「斯くまでの思召でありたか有難や」と、茲で初めて頂けるとなるのであります。

で私は相撲のことは一向知らぬも、私共がお慈悲にさからい、反抗して居る手に斯く色々ある。要するに素直に頂くという事は、私共に於いて決してないのである。素直に頂いたと思うているのに、実は皆遁げてすかして居る人なのである。故にその長々双向い抵抗する私が、初めて広大の御心に気がつき謝まり果てた一念は「本願円頓一乗は、逆悪摂すと信知して……」何人にあってもこの外は無いのであります。

十五　如実修行相応等。

次には

光明の云く。是の心作仏す。是の心是れ仏なり。是の心の外に異仏ましまさずとのたまえり。

こは只今『論註』の御文で申した通りであるから、略することとして、次に

故に知ぬ、一心是れを如実修行相応と名く。是れ正教なり。是れ正義なり。是れ正行なり。是れ正解なり是れ正業なり、是れ正智なり。三心即一心なり。一心即金剛真心の義、答え竟ぬ、知るべし。止観の一に云く菩提は天竺の語。此には道と称す。質多は天竺の音、此の方には心と云う。心は即慮知心也、已上。

「一心」は即ち昨年度『三信釈』以来お示し下さる処の論主の一心である。その一心は、広大な御真実に夜が明けさせて貰うた真実の一心である事は、屢々申した通りであります。其の一心は「如実修行相応」であるとの御教化は如実修行は『本巻』初めの処の文に

云何が如実修行と名義不相応となす。謂く、如来はこれ実相身なり、是れ為物身なりということを知らざるなり

「実相身なり為物身なり」とのことは、如来は私共の哀れなる様を御覧じて、捨て置くに置かれずして、広大なる一如実相の境界より現れて下された御姿である。而してそれは私共罪深き衆生の為なれば、即ち物の為の御身であるとの事が実相身なり為物身なりである。

故にその如来の思召の如く、実の如く頂きて、南無阿弥陀仏々々々と称え喜ぶのが、即ち「実の如く修行し相応する」である。この仏の遣る瀬なきお心が、心中に徹到して思召し通りに頂いたのが即ち相応したのであります。故に、その御まことの貰われた一念なれば、即ち「一心是を如実修行相応と名く」

『即是れ正教なり、是れ正義なり、是れ正行なり是れ正解なり。是れ正業なり、是れ正智なり。』

親鸞聖人は斯く何処へでも、曇鸞、導綽、善導の諸師方の言われたお言葉を、その儘持つて来てお喜びになる。茲は善導大師の『散善義』に六正徳と言つて、仏の仰せに六つの正しきお徳があることを言われてある。それを直ぐここにお示し下されたのであります。一一くだ〳〵と言うにもあらぬ。要するに上来お知らせ下さる仏の広大な御真実。これ一つが真の正しい教である。真の正しい義である。これを外にして真の正しい教は無いとのお示しであります

さて斯く頂き来る時は

『三心即ち一心なり。一心即ち金剛真心の義答え竟んぬ知るべし』

大分問題が前に逆上つて来た。即ち『信巻』の上下に渉りてのお言葉である。即ち前年度の講本に於いて、至心信楽欲生の三心は、結局信楽の一心であること迄お示し下されてあつた。その大信海の信楽は、即ち浄土の大菩提心である。即ち横超の金剛真心であると、とうど今年度今日までの処に於いてここまでお示し下されたのである。即ち三心即一心の義は前年度の処に於いて、一心即金剛真心の義は今年度の処に於いて「答え竟んぬ」とのお言葉である。即ち以上説く処に於いて、其の義は明に得よとの御知らせであります。

さてこの次に於いて

『止観の一に言く、菩提は天竺の語、此には道と称す。質多は天竺の音、此の方には心と云う。心は即ち慮知なり。』

上に再々繰り返された処の菩提心なる語の意義を梵語の上からお説き下されて、菩提とは天竺の言葉であつて、この国の言葉に直せば道と言う意である。即ち仏道の義である。又心の字は彼の国の言葉では質多と言いて慮知の義である。云々。この慮知の意味に就きては古来随分むつかしき理窟も言われてあるも、要がない。唯私共に於いては疑いなく慮りなく、仏の広大なお心を受け頂いた信心であることを頂けばよいのであります。以上今席は大分長くなり、殊に昨夜深更まで激しく御話した感じを申そうとしたため却つて前後錯雑しお聞き取り難くかつた事だろうと思います。要は必ずしも皆様方が多くを聞いて下さるのが目的で無い。斯く毎日々々席を重ねて聞いて下さる為に、今迄不審の方も其不審が晴れ、又無かつた人は新に不審が起つて、すべての方々が手を揃えてお慈悲に入つて下さる事唯これのみを念願する次第であります。

已上、第三回夏季求道会
第五日　第一席

歳晩の感謝

覚如上人が御往生の前年即ち八十四歳の歳晩越年の用意をすべき御貯もなくあらせられし時、御弟子が千貫文とかの志を貰うて持参せられたれば、上人非常に喜ばせられ、先以て正月仏前の御供を用意なされ、余りを以て僅か御酒を買わせられ、アゝ今年はよい年越をしたと云うて喜ばせられたということを我父は度々冬の夜長に話して下さつた。是が御一代中の気楽な御越年で其翌年の御往生と思えば実に腸が裂かれるようである。

……近角先生御自督……

恩師の警策を想う

柳瀬留治

○

私がまだ若く、信仰が判からず迷つていた頃でした。日曜講話で常観先生が

「いつまでもやがてそのうちに、と将来へ逃げてばかり聞いていては駄目である。法を聞く時は我が身の現在で聞くべきである。今現在信じられず、有難く念仏の称えられぬ者は、何時までたつても信じられ、有難い心を起こる筈はない。やがて〳〵と将来へ逃げるのは心の迷いで、それで我々は曠劫より流転し来り、出離の縁がないのである」

と仰言つたので驚いたことでした。

「我が身の現在で聞け」の一言は、我々が自力を頼んで今にすこしは本気に聞けるようにもなろうか、いよ〳〵どうにもならなくなつたらとか、御真実が判つたらとか云つて逃げる私に、打たれた釘のように今も思われるのです。

自分自身持ち悩んでいる癖に「お前の力ではとても助かる道はない。仏の御力に任せよ」と言われゝば今に何とかなりそうな妄念が出、我執が出て、任せきれず逃げるんです。

○

また、我々が信仰を求め救いを求めて縋る心、それが仏に随順しようとする心だと思つていました処、先生は

「それは仏の仰せを聞くのでなく、自分自身の思わくを仏に求めているのである。……」

安心がしたいの、喜びたいの、有難く念仏が称えたいのと、結局自分の欲念を満たし、自分が楽に、都合よくなりたいのでないか。自分の胸がこんなに空虚で仕様がありません。これを満して下さいと、胸にもつ欲念の空虚な袋に、何か有難いものを恵んで頂きたいといつているのである。

仏はそれは汝の生れつきの空虚さで、底知れぬ貪欲である。その遂げられないでいるのが可愛そうだ。それに悩んでいるのが憐れで放つておけないとのお慈悲であつて、恰も我々が空虚な袋を開いて、これに有難いものを入れて下さいと求めている、その袋の底の外側から、それだから可愛そうだと、袋を裏返しに入つて下されるのである。欲しいものが得られたのでなく、得られないの

が哀れだとのお慈悲が、思いかけぬ、丸きり反対の方向から入つて下されるのである。……」

と袋のたとえをもつてお話して下されるのでした。

○

私共が今迄、信仰心だと思い、仏を拝む心、それを菩提心とまでは思わぬけれども、殊勝な仏教心のように思つていたが、それは、空虚な心を満たし、安らかな心になりたいという欲念でしかなく、世の中で満たされない腹を、仏によつて満たそうという欲念の外なかつたのです。

かねて仏は、汝等にそうした心以外に何があるか、世において満たされず、ひもじくて困つている汝である。この念仏の粥をたべよ、との仰せなのです。

今まで信じられたら、喜べたら頂きましようと、資格が出来て念仏の粥が頂けるように思つていた事は大間違いでした。資格がないから下されるお粥です。これなくば万劫に食べられず、飢え死にする外のない私でした。資格がないから下される、何と不思議なお慈悲でしようか。

○

常観先生はよく仰言つたことです。

「私は、蛙をのまねば生きられぬ蛇なんだ。蛙をのむと人に憎まれて打ち殺されるのだ。この者に、これを食べて飢をしのげとの念仏の粥は、仏の体だ。吾々は仏を食つて生きているのだ」

と仰言つた。豫なことの出来ない吾々です。称える念仏だけが善行である筈がない訳です。仏の体を食べて生きているのです、余り誇りになる事でもないと思うんです。

○

自分が浅ましいとか、悪いとかと云うことは、何か手本になるもの、照らし出すものがないと判らぬのでないかと思うんです。今の若い世代の人達は、自分が身勝手だとか浅ましいとかいう罪悪観といつたものを余り感じないようです。大体に人間も一つの生物で、生きる為には、己を省みるなどしていては生きられない。それは弱者の劣等意識だ、喰うか喰われるかの烈しい現実生活だ。と云う風に、大体は生物学的な考えが元になつている様です。

でも真面目に生きようとしている人は、己れを省み、自分の力のなさ、欠陥、空虚さ、利己的なことを感じられると思うんです。殊に信仰に縁の深い方は、生活上行き詰つた時、一応抵抗をもつても宗教に気がつくようです。誰でも本当に信仰が判らぬ中は抵抗をもつのは普通です。求道会館のお話を聞きに見える方々でもそのようでした。先生のお話を表面から反撥されぬまでも、心に素直に聞けず、先生に又仏に立てつく心が内に起る。それだけに逆い、歯向うものを、悪いと思召さず「殊に哀れで可愛そうで捨

てられぬ」との仰せに気付かれ、一入お喜びになる有様を見ました。

今はすでに故人になられた、横浜の前田清次郎さんはその著しい一人でした。大正五六年頃でしようか、求道学者を訪ねた前田さんは、横浜の別院で何十年も聴聞して世間からは立派な同行としてほめられていたが、先生に向つて聞き覚えのお領解を長々と称べたのです。ところが先生は「あんたの話にはお慈悲がぬけている」と一言答えられたのです。自分では立派な信者と思つていたのに、先生から一本やられて、腹を立てて帰つたのですが、それからというものは心が落着かず、とうとう今迄の信心は崩れて了うたのです。

そこで日曜講話に聞きに来られ、講話の後で先生が質問のある方に一時間ばかり懇ろに応えられました。その席で前田さんの問われたことは、はつきり記憶しませんが、それは

「信仰が判るの、喜べるのと云うのは嘘です。こちらは喜べぬ、浅ましいだけです。永らく別院で色々の方から聴聞して来たが、ちつとも有難くならず、やがて仏に逆う心が起り、仏檀を踏みこわして縄でふん縛つて、外へ放つた……」

由です。先生は

「いかに逆う浅間しい心が起ろうとも、起れば起る程哀れで捨てられぬ、それは仏のみ心である」

としきりに説かれるが、前田さんは自分のそした「仏が判らず浅ましいだけ」が金城鉄壁の信仰の如く抗弁して先生の仰せを寄せつけないのです。その時先生は、

「君は何しに此処に来たのか。こちらの話を聞きに来たのでないか。さきから自分のことばかり述べたてて、わしの言うことを聞かぬ……。

黙りなさい。君の言うのは胸の暗ばかりだ。光はわしの言う話にあるのだ。顔をあげてこちらを見なさい。仏天の光明がこちらにあるのだ。!!」

と、先生は卓を叩いて大喝されるのです。驚いて見上げると、先生は満面朱を注いだお顔で仁王立ちしていられる。誠に仏の忿怒相そのものです。強の者、前田さんも口を封じられ、驚きをもつて聞き始められた。それが機となり、忽ちにして逆悪の己をかくも哀み給う大悲でましましたかと感泣されるに至つたのです。烈しく反抗されただけにその浅間しい己に注がれる仏のみ心の何と深きことかと、毎日曜の御講話ごとに涙をこぼしてお喜びになる姿が今なお目に見えてくるのです。(氏の告白が求道誌にも載つています)

さてこの前田さんには子供がなかつた。或朝仏前で勤行

していられると、近所で赤子の泣く声がする。急にその児が可愛く、我が子の様な気がし、遂にその子を後継ぎに貰う約束を両親にした。(それが大震災の前のように思うが或は後かも知れぬ)

大正十二年の関東の大震災は特に横浜は烈しく、突如と起つた上下動で、殆んどの家は倒れ、火と化し、大地が割れて水を噴き出した。前田老夫婦は別れ〳〵に遁げ、それからは前田さんは、毎日、日夜声を涸らして奥さんを探し死骸なりとも一目でも見たいと、川に浮ぶ死骸、路傍に焼けトタンを被せてある死骸をのがさず見て歩かれたが、到々それきり行方がわからず仕舞でした。

立退き先へ私が見舞に行つた時、

「かゝる宿業を持つにつけて一入仏の深い御あわれみが有難い」と念仏を称えていられたことです。

やがて前田さんの貰つた子供の太郎さんが長じたことですが、たちが余りよくなく、金使いが荒く、そのためよけい可愛想でたまらないのです。前田さんも酷く老いて脚が悪くなつたが、それでも日曜日には必ず求道会館に来るのです。そのうちに途中車にはねられてひどい怪我をされ、其後余り顔を見なくなり、やがて床につくようになり、その身持のよくない太郎さんが可愛そうでたまらず、或時太郎さんに

「私の命も永くない。わしは仏様のお慈悲一つで死ぬ。わしが死ぬと、又お前は金に困るであろう。だがちつとも心配するな。わしは仏の恵みから還相廻向によつて、必ずこの世に生れ変つて来る。そしてお前に金で苦労させない。更々心配するな」

と言われた由です。そして遂に世を去られた。やがて太郎さんはどうしたことから気付いたものか、この深い心の一言から仏の慈悲に気付き、念仏を喜ぶ人となり、前田老人の後を葬らい、一方事業の上でも成功して立派な人物となり、横浜市会議員ともなられ、又常音先生のお話を聞きに来られるという有様でした。

常音先生が講話の上でも、屢々この話をなされたことです。「還相廻向によりこの世に生れて来て、必ずお前を守つてやる。金には心配すな」には思わず涙がこぼれるのでした。全く仏心そのものです。如何なる出来の悪い人でもこの一言に、仏心を知らされると思うんです。

○

自分が本当に浅間しいとか、悪いと判るのは仏心に遇つて初めて感じるので、お前そんな心を持つていて悪いと思わぬのかと、攻め立てても、一応は悪いと思うものの、本当に悪かつたと頭の下るものではなく、救いとられて始めて、かゝる者を慈み給うかと、身の浅間しいことが判るの

です。吾々は失張り生物で、本能的に己を守ろうとする。これは体の細胞から、脳の組織までが、己を防衛し、悪くても肯定しようとさすのでないでしようか。でも「往生のために人を千人殺せ」といわれると、それも出来ぬ人間です。私も何か悪いことをしてのつぴきならなくなると信仰に気付くだろうと思つたことがあつたが、強ち別に悪事や、やり損ねはせずとも、真面目に生きようとすれば誰しも自分の欠陥や性癖に気付き、直そうとしてもどうにもならず、これが自分の病根であり、業だということに気づき「そくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思し召し立ちける本願」に頭が下ると思うんです。

○

昭和の初め頃でしようか、求道会館の夏季求道会に、藤川さんとか申す軍医さん御夫婦が、遠くから聞きに見えていられた。その奥さんという方は非常に温和な、のんびりした方で、先生が汗を流して話され、聞く人々も真剣に聞いている席上、しば〳〵居眠りをしていられるのを見受けた。後で常音先生から聞く処、その方は「どうも私は呑気で真剣になれぬ性分で本当に困ります」と先生に訴えられ、先生は「そういうわが身の一大事にも真剣になれぬ性分、そした性分は一生それ仕舞です。それで終るあなたを御覧になる仏は、可愛そうで見捨てられないのです」と申されると、立所に「何と有難い仰せでしよう」とお喜びになつた由です。

また他の方で何一つ不自由なく幸福すぎるので、これではどうしたものかと、仏のお慈悲を聞き、御安心なされたお話も聞いたことです。

心の穏かな人も、善人も、心が溝泥の様に汚いと悩む人も、又幸福で富み栄えている人も、それが業で、何かの業を持たぬ人は恐らく人間に誰一人ないことでしよう。業を持つ以上、仏の御恵みに遇えると思うんです。摂取不捨の大悲のまします以上、必ずや救われるであろうことは疑いないと思うんです。

それにこの念仏一つを吾々に届けようとされる法然聖人親鸞聖人を始め、近角両先生のあの念力が、御在世のみならず、今現在、我々の上に加えられつつあり、これが尽未来際にわたつて届けずんば止まない偉大な力を感ずることです。誠に力強く、誠に悉けなく、これまします以上は、始何なる人も安心だと思うんです。

三六、十一、十一日

近角先生講話聞記

随順の心

昭和四年六月三十日、記

聴聞子

明治四十一年の事であつた、巣鴨の東京監獄で清水弥三次郎と云う死刑囚を教誨した時の話である。

弥三次郎は群馬県の山奥で、炭焼きをして暮していた。ある時、賭博で勝ったが、相手が金を払わない。そこで相手の炭窒へ出掛けて厳談に及んだ。然し生憎相手は留守で不具者の番人が一人いたばかりであつた。弥三次郎はいきなり、あたりの蒲団や道具を持ち去ろうとすると、番人は怒鳴つて反抗し掛つたので、その剛力で容赦なく不具者を叩き殺して、目的の物品を奪取し去つたのである。

彼は獄に下されて重い罪を待たなければならなかつた。そして死刑囚ときまつたのもそれから間もなくのことである。

極悪非道の人間も、お慈悲一つで救われる。またそれ以外に助かる道はないと云うのが、私の入信以来の実験である。死刑囚にもこのお慈悲だけは聴かせねばならぬと云うのが、また私の主張であつた。当局もこれを諒として私にその実行を許して下さつた。そして初めての死刑囚の教誨に出くわしたのが、この弥三次郎である。

初めの間は、弥三次郎は段々憂鬱となつていつた。運動は勿論、食事も碌々すゝまぬ有様であつた。しかし日を経るにしたがつて、彼は何時の間にかお慈悲を喜ぶ身となり非常に心が開け、念仏を称えるようになつた。

そこで一日、私は彼にその心持ちを尋ねたところ、

「お蔭で心の蓮華が咲きました。実にこの世では身の出入にまで人様を煩わさねばならぬ様な罪深き者でありますが、仏様のお力で、南無阿弥陀仏々々々々と称えさして頂いて、次の世には自由な身にして頂くことが、有難いことでございます。命終らば殺された者とも手を取つてあやまることが出来ましよう」

と言うのである。そこで私は何の気もなく

「おまえはその様に念仏を喜んでいるが、一体念仏のわけが分つているのか」

と尋ねたのに対し

「どうしまして、訳がわかる位なら、なんでこんな悪いことをいたしましょう。私はいろはさえ書けぬ教育のない者であります。どうして念仏の訳など分かりますものか。かく称えて居て有難い念仏、訳が分かれば、定めて面白いことでもございましようが、訳は分かりませぬが、唯南無阿弥陀仏〳〵と称えさして頂いて、命終れば、楽な身にして下さると、あなたから伺いましたから、唯有難いばかりに称えるのでございます」

と答えるのであつた。私はこの言葉に思わず頭が下がつた。そして直覚的に「歎異鈔」の有名なお言葉に気附かされたのである。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおゝせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

よき人の仰せを聴かなければ、お慈悲に気が附くことは出来なかつたのであるが、しかしお慈悲に眼がさめて見れば、言葉をかけてくれた人が何であろうと問題ではないのである。

「雪の日やあれも人の子樽拾い」と云うように、寒い雪の中を歩き廻る人に「お前さん、定めし寒いことであろう」と同情してくれる人があるならば、その同情する人は誰ですかと、理屈ばつて尋ねる必要はない。同情の言葉を聴くなり、寒い心も熔けて嬉しくなる道理である。

実に弥三次郎は念仏の何たるを知らざるも「弥陀の名号称えつつ信心まことにうる人」である。「念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり」実に弥三次郎こそ、真に総じてもて存知せざるものである。

然し、法律は罪を許すわけにはいかぬ。弥三次郎の刑の執行も愈々明日、と宣告された。その前日の事である。私は色々と考えさせられた。第一彼が断頭台にのぼるとき、自分はどうしたらよいか、例えば、愈々息をひきとる時に脈の終りを診てくれる医者こそ、本当に有難い医者であるように、教誨だけはすまして、最後を見屈けぬのはよろしくない。いよ〳〵明日は、弥三次郎と絞首台で、ながの別れをせねばなるまい。斯う覚悟はしたものの、急に自分の心に一つの不審が出て来た。一体罪を悔い全く善人になつた立派な人間を是非殺さねばならぬ理屈がどこにある。

早速私は司法省に出掛けて相談を始めた。丁度裁判官も私の知人であつたし、私の言に共鳴して、とにかく本件は更めて研究すべしと云うことになり、刑の執行は一ヶ年延ばされることになつた。併し延びただけで死刑を免れたわ

けではない。

その間に検事の色々の研究、調査が連行したが、しかし仲々議論もあつたようである。そこで私は裁制官に、論より証拠、一度本人に会つて、どれ程変つているか実地を見て貰いたいと頼み、裁判官も一日弥三次郎を更めて審問する事になつた。

ところで元来私は自分のこの様な企てについて、一口たりとも彼弥三次郎には言うてない。或は弥三次郎にもそれとなく話しておき、お上にも運動をしたならば、私の力でも彼を死から救う位のことは出来たのであつたかも知らん。

併しそうしたことはよろしくない。何か芝居がかりでやつているようなものである。いよ〳〵裁判官がやつて来て、弥三次郎に「一体お前は人を殺したということになつているが、矢張り殺したのではなかつたそうだなあ」と問いかけると、彼は見事罠にかかつて「はい、殺しはいたしません」と言つてしまつた。

後日裁判官が私に向つて「矢張り、殺さなかつたと言つていますよ」と告げられた時に、私は殆ど自分の立場を失つた感じがした。私は大いに失望したのであるが、よく考えて見ると、弥三次郎の心事が読めるような気がした。一度殺されるときまつた者が、兎に角、先ず執行が延びた。彼は単純に殺さなかつたとでも言えば命が助かるとでも思つたのであろう。彼のその時の心持ちを察したならば、仲々同情の限りである。

私が彼に会つて

「お前はとう〳〵人殺しをしなかつたと言つたそうではないか」

と尋ねた時、彼は両眼から涙をボロ〳〵落して

「はい。はたの人々はみんな私を助けてやろうとして居て下さるのに、私は自分で助からぬようにしてしまつているのであります」

と言つて頭を垂れた。その後約一ヶ年の間と云うものは、彼のおこないは非常に立派なもので、あたりの人が感心し尽したものである。又月の夜などは端坐して念仏三昧であつたそうだ。コウコウ（漬物）が二切れつけてある時は、一切れは余分で自分のものではないからと云つて返してきたということである。

やさしくしろと云われて、随順の心になれる吾々ではない。吾々の本性は何処までも歯向い逆う心である。この悪逆の煩悩具足の凡夫と呼びかけて憐みを垂れ、悪い者を何処までもお見捨てない仏の御同情に遇つてみれば、如何なる強情な者も頭が下がつて、有難いとなる。これが絶対者の前に折れた心である。

そして一度かく心が折れて見れば、相手の善し悪しは問題でない。彼の人には順い、此の人には逆うと云うような区別のあるものでない。心に無一物であるからは、誠に有難うございますと、誰に向つても随順になれるのである。

又一度かくお慈悲に遇つたならば、仮令世の中が如何に冷たかろうと、家庭が如何に面白くなくとも、無限無量の同情者に励まされて随順の中に通つて行けるのである。これが「心頭を滅却すれば火もなお涼し」である。これが楠正成の来問「生死交叉の時如何」に対し、明極禅師の快答「両頭断じ去り一劔空に倚つて寒し」の出て来る所以である。一劍は即ち南無阿弥陀仏である、お慈悲に眼の覚めた味いである。勅命に随順して負け戦と知りながら七生を誓つて湊川に出陣した犬死（①）である。忠臣の心が察せられる

（註）① 昭和四年五月十二日。求道会館日曜講話の常観師のお言に「忍終不悔」「ミヲシノンデツイニクイズ」犬死しても後悔せず、（昭和三六年九月十日追記）

師の恩

「師教の恩致」の一節。

昭和四年七月二八日近角先生講話

安政の初め、野村子爵が牢に下された。友人の伊藤公がその師の吉田松蔭先生にそのことを話すと、先生は

「野村も淋しかろうからこんなものでも送り届けてやるがよい」

と云つて、漢書の一冊を渡されたから、公は急ぎこれを牢獄まで差入れた。

野村子は無聊のつれづれに繙いて見たが、一向に面白いものではなかつた。後年、野村子は出獄して民政にたずさわる事となり、神奈川県を治めることとなつたところが、或年、稲の害虫が跳梁して如何とも致し方がない。そこで県下の民に広く意見を問うことにした。色々の意見が出て来た中に、名も知れぬような人間から、その方法については支那の何々と云う書物に出ていることを摘出して来た。

子爵は、何だかこの書物が何処かで聞き覚えのあることに感づき、書を伊藤公に寄せて尋ねたところ、これが往年獄中松蔭先生から贈られたものだと云うことがわかつて吃驚したと云うことである。

（備考）

仏の善巧方便は斯くまで行き届いたものである。

伊藤公と懺悔

昭和四年七月某日　近角先生講話の一節

島田蕃根翁は色々のことを知つていた。又人の一寸及び、難い観察を時々語つていた。或時、伊藤公の不品行の噂に関して斯う語つていたのを聴いた事がある。

『世の中では、伊藤公は不品行だと謂うけれども、いくら伊藤公でも、往年、恩師、松蔭先生の生首を風呂敷に包んで帰つて来た当時の事を懐想したならば、いくら伊藤公でもおこないが正しくなるであろう、云々』

（備考）

人の生れつきはなか〳〵直らぬものであろう。然し、至誠天地を動かす真実のためには、いかなる人も襟を正す事であろう。この真理を疑わずして人を観察するところに蕃根翁の偉大なる人を信ずる心が看取されるのである。

心と真実

第四篇　花と実

（御前も横向いたな）

佐藤強三郎

善兵衛は病気も全快して、日に日に元気になり、又活動し始めた。

この部落は麓の谷間にあつた。ここから小学校までは約二千米県道が山裾を廻つて、途中に溜池もあり、やがて中程から車馬の通る小さな里道に分れ、田圃を通つて学校まで続いている。山から出て来る小川は、清く澄んで、小蟹も沢山居た。谷をせき留めた溜池は、面積約一町歩、これは夏の灌漑用水であるが、また養魚場にも利用された。寺の裏山には数百年を経た老松の森があり杉も良く茂つていた。山は遠く高い山に続いている。

毎朝六十人位の男女の学童は互に呼び合つて通学した。四月の学期始めのある日、善兵衛が田圃の道を行くと、二年生の男の子が、一人でとぼ〳〵と悲しそうに、連れにおくれて行くのに会つた。自転車から降りて

善兵衛「どうしたんだ、みんな学校へ着いた頃ではないか」と話しかけても、その子はだまつている。家が貧しいので、古い布鞄に上衣の肘に穴のあいている洋服を着ているが、帽子がない。この子の父親は南洋へ出稼に行つているのである。

善兵衛「本がないのか」と聞けば、子供は頭を振つた。
善兵衛「帳面が無いのか」とたたみかければ、また頭をふつた。
そして泣き出した。善兵衛は子供の頭をなでて
「それじや、鉛筆がないのか」ときけば、
子供「クレオンがない」とかすかに言つた。
善兵衛「そうか、泣くな、泣くな、わしが買つてやる」と自転車をひつぱりながら話を続け、共に歩いていた。そして、
善兵衛「これから買つてやるから、校門の前の松の木の所で待つて居れ、すぐ行くからな、いいな。」と云うと子供はうなづいて見上げた。
それから急に自転車に乗びのり、一目散に走り出して、購売組合へと向つて行つた。程なく後から歩いて来た子供と例の松の木の所で会い、クレオンを渡して
善兵衛「泣くな、元気で勉強しな」と、また頭を撫でて別れた。
子供はジーと後姿を見ていた。その後子供は道で会えば、ニコニコして彼を見た。子供の母も、遠くから善兵衛を見れば、もう首巻をとつて「先日はありがとう」と自転車で行く彼に挨拶した。
或夏、日照りが続いて、その部落は用水に不足で大変不作に困つた。丁度、善兵衛が水利委員をしていたので、その対策に役場や県庁と交渉した。大字では
善兵衛「この村にある溜池を深く掘り下げ、上流の小川の呑口を整理して早く多く水が溜る様に改良しよう」
と発議した。その時、村の人々の内には「日照りの不作は五年か十年に一度位のものだ、今更驚いて、そんなに金をかけ手間をつぶして強いてやる程でもないだろう」と云つた者もあつたが
善兵衛「溜池には三百年以上の歴史がある。最初は殿様と奉行などが主張したそうであるが、村の先覚者が非常な苦心をして、協力一致、全く人の手と人の背で土をはこんで造りあげたものだそうだ。それ以来、他の村では度々旱害を被つたのに、わが部落だけは、あの溜池のおかげで、何回となく被害をまぬかれてきた。それに数百年間ほとんど用水費を使わずに、他字に負けぬ収穫をあげてきた。それを思えば今度の工費や手間など惜んでいる時でないと思う。先覚者の恩にも報いようじやないか」
と熱心に主張し、遂にその改良工事を遂行することに一決した。
地主の負担金、工事人夫費を適正にきめ、鉄製のレールを引いて大いに文明の利器を利用し、三年計画で始めた。村や県の補助金をも貰い、二年半で完成した。村は春も夏も、田も人もいきいきとしてきたように見えた。
この地方では人体に寄生虫がはびこつていて、村中の人々は青い顔をして栄養不足に悩む者が非常に多かつた。これは健康上、経済上大きな問題であつた。善兵衛は此所に目をつけ、最近発達改良された駆虫薬を研究して、部落で大量共同購入して腹の虫退治を計画した。そして役場、官庁の協力を得て実行し、部落民の九十五パーセントまで患者であつたのを僅か五パーセントまで引きさげることに成功した。それからは各家庭でも自らすゝんで寄生虫の駆除に熱心になつた。その結果、意外にも、この部落の野

菜は寄生虫が居ないという評判をうけて他より高く売れ、思わぬ得を招いた。
或年、独り者の婆さんが八十才近くなつて淋しく死んだ。善兵衛は葬式の費用を殆んど受持つて、身分にあまる立派な葬式を出してやつた。そしてその命日にはよく自分でお墓へ花や線香をあげて冥福を祈つてやつた。これには壇那寺の住職までが頭を下げて
住職「善兵衛さんにはかなわぬ。死ねばきつと極楽へ行くでしよう」とほめそやした。
善兵衛「ありがとう。然し死んだ先は、あなたまかせですからね。然し、自分をかえりみれば恥ずかしい」
と云つたが、内心大いに得意であると人々は色眼鏡をかけて見ていた。
彼は方々へ行つては信仰を説き廻つた。朝から晩まで妻に小言を言つた。
善兵衛「前の家のおかか（妻）が風を引いて、医者が自動車で来たという、見舞に行け」と妻に言えば
妻「今は見舞の品がないから、すぐには行けぬ。いつも見舞品を家では貰つているのだから……」
善兵衛「今日は、新聞に右隣りの家の娘が高校へ入学したと出ていた。お祝に行け」
妻「何か祝品がなければ行けぬ……」
善兵衛「今、家の庭先きで近所の子供が遊んでいるから、何か菓子でもやりな」
妻「帰る時にやります。家へ持つて行つて、家の者に見るようにやらなければ、つまりませんもの」
善兵衛「お前はいち〳〵そんな根性だから駄目だ。見舞に行くのも、菓子をやるのも、第一が気持のものじやないか。品物ばかりが有難いのではないよ。気持がさきなのだよ。品物はその気持をあらわすしるしにすぎないのだ、と自分は思うが」
と事々に責めたてる。家内の者は勿論、周囲の人々も、こういち〳〵やられてはかなわぬと、善兵衛の姿を見ると逃げるように見える。或者は「善兵衛は以前は〝表彰馬鹿〟だつたが、今度は〝信仰馬鹿〟になつたのじやないか」と非難する者さえ出来たようだ。
信哉はまた区長の家へ来て泊つた。そして善兵衛の得意な様子をきいた。或晩二人きりの時
信哉「私はこんな話をききました。ある学校の先生が、教室で熱心に算数を教えていた。先生が黒板に字を書いているときは、自然と生徒の方に背を向ける。御行儀の悪い生徒はこの時とばかりにさわぎ出し、うしろを向いたり、横を向いたりする。そこで先生が「皆さん、正面を向きなさい。横を向いてはいけません」と教えた。しばらくするとB生徒が立つて「先生私のうしろのAさんが横を向いて居りました」と言いつけた。先生はしばらく一同を見まわせば、教室内はシーンと静かになつた。やがて先生は「B君も横向いたな、君が横向かなければ、右うしろにいるA君の事がわかるわけがない、君も気をつけなけれ

ばいかん」といましめたとのことです。
私共、あの人が悪い、あの人が間違つている。あの人はまだ足らぬ、と他人の事に眼をつけて、あれこれ文句を言つて、人に嫌われるのは、其時は私共がすでに横向いているのです。
信仰という棒で人を叩いて廻ります。信心とは人を責めるためのものではないのです。自分が安心して行くためのものでしよう。自分の信仰を得意にほこり、自分の得たこんな珍宝は貴いものだと、自分だけが偉くなつた様に振舞つて、人に排責され、反感を持たれるなどは、自分が横向いている証拠なのでしようか」
と、其夜は長く話した。
善兵衛は後で色々の事を考えた。
「自分は信哉さんに会わぬ前に、捨吉へ……妻の病気見舞に白米壹俵持つて行つた時は、実によい気持であつたそれは何等返礼を考えなかつた。然し思えば……内心深く返礼を求める、五分五分の心を秘めていたのであつたが、意識していなかつたのであつた。後で捨吉が、いつまでたつても礼を言わぬのが気にかかつて来た。礼物を返さぬのが癪にさわつてきて遂には表面に現われてきて不平ばかり言うようになつた。年を重ねるにつれて、だん〳〵捨吉を憎み、死んでも死にきれぬ、と恨み通す様になり、明けても暮れても煩悶の種子になつてしまつた。そこへ思いがけなく信哉さんが来て、
『恩を施して苦しみ、恩を受けて苦しむ。それが凡夫の人生です』と意外なことを聞かされた。そこで初めて返礼を求めないなどと、口では言つていても、心ではチヤンと返礼をあてに待つて居たという、五分五分根性の自分であることを知らされて驚いたのであつた。……然しそうと分つても、その恨む心を止めることが出来ない。不純の悪い人間であると気付いて来た。
……その時に、実にその時に、その悪人たることを、仏かねてしろしめして、それを憐んで、どこ〳〵までも呆れ給わぬのだと敬えられた。……そしてその広大無辺の御慈悲の前に頭を下げて降参したのだ。そして自分の五分五分根性、即ち返礼を求めて止まざる根性が無くなつたのでなく、それが世間的表彰、名誉のよろこびのために、心の奥にひそんでいたのに過ぎなかつた、ということを知らされた。
その後、自分の病気も治り、仕事も出来て、よい気になつて来た。そして又人にほめられたり、礼を言われたりして、唯我独尊の高慢になつて来た。
いつの間にか、自分の信仰こそ正しいのである。これひとつが一大事である。お前のやり方、考え方は間違つている、それは駄目だ。あれではいけない、と見る人毎に批判し攻撃して廻る。自分は仏ではなかつたのだ。仏になつたのでもないのだ。五分五分根性は無くなつてしまつたのでもなかつたのだ。そんな自分が、人に向つて出来もしない、考えもしない事を無理に強いるのだ。人は困るであろう。逃げたり、かみついたり、憎んだり、蔭口言うわけである。俺は、知らず〳〵のうちに……横向いて居た、のであつた。」

善兵衛はそれからよく足下を顧みるようになつた。そして自分の凡夫たることを考えた。「そうだ、自分の親切はガラス位のものであつた」と反省した。
善兵衛は寝ては考えた。「自分がもしこのお慈悲に遇わなかつたら、たとえ村一番の金持になつたところが、それを誇り、権勢を張り、人を見下して高慢になつていたであろう。そして家人を不足に思い、人に親切をしては、相手が感謝しないといつて恨み、遂には淋しく死んで行つたに過ぎないであろう。もしそうだとしたら誠につまらぬ一生であつた。それが今は、いろ〳〵心の楽しみがあるから、自然と酒にふけることも減つてくる様である」と心によろこんだ。
善兵衛は家庭でも倅と協力して、乳牛を導入して大いに蓄産を奨励した。又寺の住職が初めて蜜柑の試植に成功したのに着目して、最つ先に蜜柑の栽培をした。これが後年この地方の一大物産となつた。
善兵衛はまた読書して勉強することを楽しんだ。時々、
山は山川は昔に変らねど変りはてたる我心かな
の歌を思出して感慨にふけつた。昔捨吉に米壹俵見舞にやり、知らず〳〵の内に、心の底に、捨吉からの返礼を強く期待していたのであつた。何事をやつても、必ず心の底には「ほめられたい」という紐をつけて置いたのであつた。そして自分では、紐を知らずに得意になつてやつて居たのであつた。
彼は金をもうける事がます〳〵上手になり、そして大いにもうけては大いに人に施した。後には又推されて村長になつた。清く正しく明るい村政をやると声明した。そして毎日自転車で約二キロの道を村役場へ通つた。道すがら、大人は勿論、幼児までにも丁寧にお辞儀を返した。
半年位経つと子供等は、善兵衛を道で待つていて、村長から「お早う」と言つて貰うのを楽しんでいるようであつた。中には手を振つて迎える子供もあり、村長の自転車のベルを聞くと、家から飛び出して来る子もあつた。「子供の挨拶ほど無邪気で純真なものはない、そこには何等の不純のものがない、こんなすが〳〵しいことはない」と善兵衛はしみ〳〵思つた。……。
善兵衛は時々一人静かに仏間でお経を拝読した。蓮如上人御一代聞書をよく読んだ。或時、その中に
「皆人毎に、よきことを言いもし、働きもすることあれば、真俗ともに、それをわがよきものにはやなりて、その心にて御恩ということはうちわすれて、わが心本になるによりて、冥加につきて、世間仏法ともに悪き心が必ず〳〵出来するなり、一大事なりと云々。二二九。」
とあるのに目をつけて、何度も〳〵も繰返してよんだ。
「あゝ、御恩という事を打ち忘れて、自分が偉いものになるから、福も尽きて、悪い心が起るのだ。これはいよいよ気をつけなければならぬことだ」
と反省して、益々御経を読む様になつた。

歎異抄の放つ光

花田正夫

歎異抄を拝読する時、何人も強く心を打たれ、驚嘆させられまことは、親鸞聖人が、御自身のこととして自己の無智さと、自力の無効さを、仏法、世法の上においで、生活の各方面にわたつで、具体的に、もうこれ以上言いようのないまでに徹底的に告白されていることであります。

一条に　「罪悪深重、煩悩熾盛の衆生」

二条に　「念仏は浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。」

「いずれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」

三条に　「煩悩具足のわれらはいずれの行にても生死を離るることあるべからざる……」

四条に　「今生いかに愛し不便と思うとも存知の如く助け難ければこの慈悲始終なし」

五条に　「父母孝養のためとて一遍にても念仏申したることいまだ候わず」

六条に　「親鸞は弟子一人ももたず候」

九条に　「喜ぶべき心を抑えて喜ばせざるは煩悩の所為なり。……いささか所労のこともあれば死なんずるやらんと、心細く覚ゆることも煩悩の所為なり。久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、未だ生れざる安養の浄土はこいしからず候ことまことによく〳〵煩悩の興盛に候にこそ、」

十三条　「兎毛、羊毛の端にいる塵ばかりも、造る罪の宿業にあらずということなしと知るべし。……さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべし」

総結文　「善悪の二つ総じてもて存知せざるなり。……煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」

以上誌しましたことの一切を内包しで、よきにつけあしきにつけ、折にふれ縁におうて、聖人が仰せられた御持言が、「弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にでありけるを、たすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」でありました。特に「さればそくばくの業を持ちける身にありけるを」との御述懐の中に、罪悪深重、煩悩熾盛な、無力無智の御自身の罪業の一切がすつかりおさめられているのであります。

さてこの聖人の如実相、ありのまゝの御姿というものは聖人の御力によつで見出されたものではありません。成程聖人は長い叡山の御苦労なさいましたけれど、それは煩悶状態でありまして、聖人の御救いは、よき人法然聖人の仰せによつてひらかれたのであります。よき人の仰せが光明となつで、暗黒の聖人の胸を照らし、そこに御自身のありのまゝの姿が照らし出されたのであります。如来よりたまわる智慧の光明によつで浮かび出た凡夫さながらの姿を告白懺悔せられたのであります。

われならぬ清らのわれのわれにありで穢悪のわれを
われにしらしむ

と池山先生は或時詠じられましたが、仏智の不思議に帰入させられて自然に知らされる境界であります。それだけに、他人が覚めようが議ろうが消すことも出来ず、自分の力で覆いかくすことも出来ぬ、のつぴきならぬ私共のさながらの姿であります。

しかもそれは、知らされた時にそうであるばかりでなしに、遠い過去からそうであつたので、これからさき何時までもそれより外にありようのない姿であります。

なおそれは、聖人の御自身のことであつで、そのまま一切の凡夫の如実相であります。教行信証の信巻に

「仏意はかりがたし。然りといえどもひそかに斯の心を推するに一切群生海、無始よりこのかた乃至今日、今時にいたるまで、穢悪汚染にして清浄の心無く、虚仮諂偽にして真実の心無し。」「急作急走して頭燃をはろうが如くすれども、虚仮の善なり雑毒の善なり。真実の行と名付けざるなり」

これは聖人の持ち合せの分別智でなく、頂かれた仏智によつて照見された、聖人を含めた一切群生の如実の相であります。即ち誰もいやといわれぬところであります。

さて、人生に一点の光もなく、地上に寸地の身を置くところも無いことを徹底的にお述べ下さるのは、徒らに私共を絶望の崖につきおとそうが為ではありません。それによつて、私共が遠い昔から唯一のたのみとし、力としてきて、そのために幻滅又幻滅と迷い続けて来た、自力の執心（自力我慢の心）自見の覚悟（自己中心の見解）の全部の駄目さを知らせて下さると共に、その者こそ、弥陀仏の本願のお目あてであるぞと気付かせて下さろうがためであります。　唯円大徳が、聖人の常の仰せをとおし、

「さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて、我等が身の罪の深きほども知らず、如来の御恩の高きことをも知らずしてまどえるを、思い知らせんがためにて候いけり」

と感佩しているのも、耳の底に残つた聖人の御物語というものが、光明となつて唯円大徳の心の闇を破つてそこにあらわれて来る自分の姿がすつかり聖人の仰せ通りであると、同融同化同心せしめ

られて、聖人のお言葉の中にこもるあつい思いの一杯が身に泌んで、あゝそうであつたか、とうなづかされた声でありましよう。

然し聖人のきびしい、微塵の妥協も許されない御述懐を聞き初めてから、一味に同化せられますまでには、種々の過程を経るものであります。

自力、我慢、我見という野性の猛獣が初めから柔順であろうはずはありません、印度の原野で獲られた象が、動物園で曲芸をするまでには調象師の苦心はなみ〳〵ではありません。反抗し、乱動し、すきあれば遁走しようとして、根限り抵抗を続けるものであります。

然しどんなに私共が抵抗し反抵し遁走を企てましても、聖人の仰せの世界からは微塵も出ることが出来ないで、やがて聖人の仰せ通りでありますと、そこへひきこまれずにはいられないのであります。

時代は如何に移り変りましても、また国境を異にし民族が変りましても、人間の頭は一つ、手と足は二つでありますように、仏智に照らし出された、聖人の御眼にうつる人間像はすこしのくるいもありません。そこに老少善悪、貴賤男女のへだてなくことごとくがおさめられるのであります。

七百年の昔、唯円大徳の耳の底にのこつた聖人の実語は、歎異抄とあらわれ、只今現に私共の心の底に光を放つて私共の如実の相を告げ知らして下され、如来の本願のお目あてをしらせて下さるのであります。

そして聖人は剛情我慢の私によりそうて

「しかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と、仰せられたることなれば他力の悲願は、かくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。」

と、同坐、同唱して下さるのであります。

法信抄

○

東京都　誉田文子

……毎月「慈光」有難く拝読させて頂いて居ります。さて此度、常音先生の想出につき、何か書くようにとのことでありますが、実は何を申上げてよろしいのか、戸惑うて居ります。

常音先生の想出は、年、月を経るにしたがいまして、いよいよはつきりと、私の胸中に生き〳〵と甦つてまいりますが、先生の想出を語らせて頂きますには、余りにも追憶は際限なく、又先生の御慈愛はあまりにも深過ぎまして、幾度かペンを取つてはみましたものの、只今の私には、とても文字に綴ることが出来そうにもございません。

只、過ぎ来し十数年間を振りかえります時、自分を振りかざしては、苦しみまどい、頑強に抵抗し続けてまいりました私に、何時、どんな時でも、深夜にいたるまで、常に慈言を以つて、真実の信をとどけるまではと、導き給い、御相手下さいました先生の温容の、一コマ、一コマが、赤馬灯の様に甦つてまいるばかりでございます。私が最後の土壇場に追い詰められていた時でございましたか、先生は思い余つた様にポツンと

「あなたの方は、御慈悲が判らなくなり、消えたりなんかするけれども、近角が今まで話して来た言葉は、絶対に消えぬものだ、と云うことだけは覚えておきなさい」

と言われました御言葉が、今ヒシ〳〵と胸に迫つて参ります。

私が判ろうとした信仰は判らずじまいに駄目になつてしまいましたが、御仏の、先生の遺る瀬ない御言葉の数々は、私の胸中に強く焼付き、絶対に消え失わぬものとなつてしまいました。先生居まさずば、何処の果をさまよい歩いていたでございましようか。唯々感謝の涙あるのみでございます。何卒御推察お願い申上げます。……。

○

東京都　柳瀬留治

川畑愛義様

……「慈光」七月号にて誠に有難き御講話を拝読させて頂きまして感慨黙し難く、心の一端をお伝え申したく、御判読いただけましたら幸いに存じます。

あなた様は「ただ念仏して」のお言葉にお気付きになつたこと、これは深い仏縁の御催しと嬉しく感慨に堪えません。その「ただ」が中々判らず、私は長年苦しみました。純真に「ただ」になれぬとか、喜べたらとか、信じられたらとか、何かの資格が生じなければと、思惑がくつ付いて動きがつきませんでした。

何の対価も入らぬただ「否、仕末のうてぬ疑や、煩悩妄念、すべてを引受けた上「ただ」下ざる念仏なんだ。ただ称えよ、との仰せなんだ、の、その「ただ」が判らず困りました。

本当の「ただ」なんだよ、と云われて、びつくりしました。へえ！ただですか。なんつて、滅法な、世にあり得ぬ、不思議なことだろうと驚きました。あとから、それでなくつては助かる道のない自分だ、ということが判り、何と有難い念仏だろうと、感泣するばかりです。

御講話を拝読して感銘しましたもう一つは、あなた様は直ちに、弟様、お妹、母上様に、これ一つはどうあつても聞いて欲しい、と申されたこと、その熱意に驚きました。私は信仰の判らぬ長い間、この信仰一つが得られたらば大いに人にも伝え得ようと思つていましたが、この仕様のない私のための念仏だと判つて見れば、全く私一人のための念仏で、人どころでなく、自分だけで精一杯で、信仰は私ごとだという風になり、軽々と他言出来ず困つています。私も七十になり、私の生涯に得た価値は、この念仏ただ一つなんだ。厭でも思い切つて声を極めて言わねば残る命は幾ばくもないと思つている処です。たとえ迷信に取られようと、又老人の遁場だと思われようと、これ一つは言わずに終つてはならぬと思つている処です…。

あとがき

師走となりました。御忙しいことと存じます。

この二日は常観先生の忌日として、例年の様に先生の特集とさせて頂きたいと思い特に柳瀬留治様と聴閑子様にお願いして原稿を頂きました。

私は直接にお聞かせ頂いたことはすくなく、その点まことに淋しく思いますが、こうして諸先輩の心底に自然と刻まれている先生の御法話を読ませて頂き得ますことはまことに有難いことであります。それにつけましてもお願い申したいことは読者の皆様方の中に、直接先生から御聞きになつたことで、お心にお残りのことがありましたら、私共に是非お頒ち頂きたいと存じます。

★

先月十六日夜半、岡山県早島町の生沼家から、故生沼曹六先生の奥様の逝去の報をうけました。更に速達便で奥様の死の前日の御遺言として、

……私は咽喉が痛くて御飯がたべられませんので、去る十月十八日岡山国立病院に入院して居ります。

近日中に、近角先生の書を一幅お送り申上げますから、どうぞ長く御愛読下さいませ。次に私も余命僅かになりましたので存命中に法名を頂きたいと存じますので早速に御送り頂きたく御願い申上げます。

十一月十五日　生沼とり代筆

とありました。実は作夏、生沼先生の十七回忌に岡山医大でお世話になつた人達が集つて追吊会が催されました時、奥様から小経一巻を特に私に読むようとのお招きを頂きましたのに、病躯に障えられて不参いたしましたところ、本年はお東上の途中御来庵下さる由で、心待ちにして居りましたのに、食道癌ですでに御往生遊されました、噫……。御遺言もだし難く、御俗名の「とり」から浄土の鳥とその声が思い浮び

法名　和雅院　釈尼白鶴　信女

と撰し、御送り申上げました。思えば近角先生記念号編集中に、先生を生涯おしたい申された生沼先生の奥様の訃を聞き、ここに誌させて頂けますことも、御縁の遠く深いことに襟を正さしめられます。

★

「心と真実」の佐藤強三郎様の原稿は一応これで完了させて頂き、正月号からは「一堂の鈴」という新しい原稿を頂いて居りますので連載いたします。御骨折りの程厚く御礼申し上げます。

★

皆様の御無事にお越年の程を念じ申しつゝ十二月号の筆を擱きます。　合掌

御案内

毎月、第一、第二、三日曜、午后一時半日曜講話。一道会館。市電、新郊通り一丁目下車。

来年からは御一代聞書と教行信証の大意を読まして頂きたいと心組んで居ります、

毎月廿四日、午前、午后、昭和区小桜町教西寺。法話会

十二月二十日午后、四日市々大矢知町、真西寺。廿五、六日、桑名市伝馬町報恩寺、午后。

定価一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番